

バルザック『従妹ベット』における「未開人」

民衆の危険な力

東 辰之介

はじめに

バルザック晩年の傑作『従妹ベット』(1846)は、ユロ男爵一家によって田舎からパリに呼びよせられた従妹ベットを主人公とする物語である。貧しい親類が社会的地位の高い一家に従属した生活を営む時、そこにどのような摩擦が起こるかという主題は、同時期に書かれた『従兄ポンス』(1847)と共通のもので、二作はあわせて「貧しき縁者」という総題の下にまとめられている。

もちろんバルザックは、同じ話を主人公の性別を変えて二度書いたわけではない。ベットは野育ちの百姓出身であるのに対し、ポンスはイタリア留学までした音楽家であって、独身であり貧者であるということ以外二人の間に共通点はなく、一家と彼らの仲を険悪にする事件が起こった後の行動にしても、復讐計画を練るベットと、蟄居するポンスとはまったく異なっている。その限りにおいて、『従妹ベット』は一種の復讐譚として、また『従兄ポンス』は破滅劇として、それぞれ独自の側面を持っているというべきであろう。

ただし、『従妹ベット』を一般的な復讐譚として読もうとすると、若干の無理が生じるかもしれない。なぜなら、読者が復讐者の怒りと絶望を共有し、その復讐の進行を喜びとして感じられるように、主人公を魅力的な人物として造型しておく一般的な復讐譚とは異なり、『従妹ベット』の主人公ベットには読者の感情移入を促すような資質があまり見当たらないからである。ベットが遂行する復讐は、読者がその成就を無条件に喜べるようなものとしては描かれていないのだ。

それではなぜバルザックは、復讐の物語からわざわざ読者の共感を取り去るような書き方をしたのであろうか。それこそガリアリズムの流儀だからと言えばそれまでだが、おそらく復讐者ベットが揺るがそうとしているのが、ユロ家によって具現される家族制度ひいては社会秩序である以上、いかなる条件においてもその行動は善ではあり得ない、というバルザックの思想が背

後にあるからであろう。ベットの復讐は、いわば貧しい民衆の社会運動にも比べられるべきものであって、その成功を華々しく描くことはバルザックの本意ではないのである。

そこで本稿では、ベットに認められる「復讐する民衆」とも言うべき側面に注目し、一見すると単なる家庭劇にも復讐譚にも見える『従妹ベット』が、バルザックによる当時の社会分析を反映した作品であることを示す。その根底には、活発化しつつあった民衆階級による権利要求を、有産階級にとっての脅威としてとらえていたバルザックの保守的な思想が見出されるだろう¹。

さらに本稿においては、社会に必要なのは平等よりもむしろ階層的な秩序であるとするバルザックの保守的な思想が、個人は生まれ持った「知能」の限界にしばられており、社会的地位の上昇には限度があるという考えと結びついていることを示した前稿²に引き続き、『従妹ベット』にあつては、「知能」の質的な差異が問題になっていることを明らかにしたい。

その際注目されるのが、民衆の「知能」がいかなるものであるかを説明するにあたってバルザックが用いる「未開人 Sauvage」という用語である³。バルザックにおけるこの語の意義については後述するが、『従妹ベット』における社会分析の根幹にあるのは、人類を「知能」の性質に応じて「文明人 homme civilisé」と「未開人 Sauvage」に大きく分類する発想であると思われる。これをふまえて本稿では、ベットがいかなる意味で« Sauvage »なのかを明らかにした上で、それとの関連においてベットの復讐の様態を考察し、バルザックの思索の後をたどってゆくこととする。

¹ ニコル・モゼは、ベットはバルザックがそれまでに描いた老嬢たちよりも『農民』の登場人物に近い存在であると考え、その社会的な危険性は、彼女が老嬢であることよりも、民衆出身であることに由来すると指摘している。Nicole Mozet, « La Cousine Bette, roman du pouvoir féminin? », *Balzac et les Parents pauvres, études réunies et présentées par Françoise van Rossum-Guyon et Michiel van Brederode*, SEDES-CDU, 1981, p. 35.

² 拙稿「近代社会における「知能」—バルザックの場合」、『仏語仏文学研究』第27号、東京大学仏語仏文学研究会、2003年、p. 87-106.

³ 既存の邦訳に倣って、「Sauvage」を「野蛮人」と訳すことも不可能ではないが、「野蛮人」という日本語に強く感じられる「乱暴さ」のイメージが、『従妹ベット』で使われている« Sauvage »の用例には必ずしも適当ではないと判断したため、本稿では「未開人」という訳語を採用した。とはいえ、「未開人」という訳語も便宜的なものであることは避けられないので、「自然に近い人間」というバルザックの言い換え（後述）の方を、その実質的な意味として理解していただきたい。ちなみに、本稿において「野蛮」という語は、「barbarie」の訳語として用いている。

「文明人」と「未開人」

まずは、バルザックにおいて「文明人」と「未開人」が意味するものを正確に理解することから始めたい。バルザックの用語は必ずしも一定していないが、文明の側にある人間と、自然に近い人間とが二項対立的にとらえられていることさえ押さえれば、解釈上の問題は生じないように思われる。バルザックは、「文明人 *homme civilisé*」が観念と感情の両方を持つのに対して「未開人 *Sauvage*」には感情しかないと主張している。

自然人 (*homme naturel*) と文明人 (*homme civilisé*) をへだてる違いのすべてはおそらくここにあるのだ。未開人 (*Sauvage*) には感情しかないが、文明人には感情と観念がある。だから未開人の場合、頭脳はわずかな刻印しか受け取ることができず、何かの感情に襲われると、その感情に完全に屈してしまう。ところが文明人においては、観念が心へと下ってそれを変えてゆく。文明人は無数の興味といくつかの感情に引き裂かれているが、未開人は一度に一つの観念しか受け入れない。子どもが親に対して一時的な優位を占めることがあるのはこのためである。ただし、子どもは欲望が満たされるとおさまるが、自然に近い人間 (*homme voisin de la Nature*) の場合にはこの状態がずっと続くのだ⁴。(86)

「文明人」は多くの観念を頭脳の中に蓄えており、それによって衝動的な感情を抑えることができるのに対し、「未開人」にはそうした観念のストックがないために、一時的な感情によって頭脳の全域を覆われてしまう。「未開人」に認められる「一度に一つの観念」とは、もともと感情だったものが一種の固定観念と化したものであろうか。とすれば「未開人」にも観念があるのだが、それは「文明人」におけるように感情の暴走にブレーキをかけるのではなく、むしろ感情を強化する役割を担っていることになる。

では、無数の観念のストックによって一時的な感情の専制から逃れている「文明人」と、感情の専制に屈し、わずかな観念もそれに隷従してしまう「未開人」とが相対したとき、いったいどちらが優位に立つのであろうか。語り手は、両者の力関係を「親」とだだをこねる「子ども」の関係になぞらえ、普段は「文明人」が「未開人」の優位に立つが、「未開人」が強い感情にとらえられた時には優劣が一時的に逆転すると考えている。

⁴ *La Cousine Bette, La Comédie humaine*, nouvelle édition publiée sous la direction de Pierre-Georges Castex, Gallimard, Bibliothèque de la Pléiade, 1976-1981, 12 vol.(以後 CH と表記), t. VII. 本稿で『従妹ベット』を引用する際は、すべてこの版を典拠とし、引用後の括弧内に頁数を示す。

ところで、このように説明される「文明人」と「未開人」の相違と、その相違に由来する優劣についての議論は、『従妹ベット』に特有のものではない。同じような考えが、バルザックの別の作品において過去に表明されていた。『歩きかたの理論』(1833)の一節には、複数の関心事に引き裂かれる「社会的人間」と、ただ一つのことに身を捧げる「未開人」との対立が、よりはっきりと述べられている。

魂は遠心力で得るものを求心力で失う。

ところが、未開人 (sauvage) と子どもは、球状に広がる生活圏のあらゆる半径を唯一の思考、唯一の欲望にむけて集中させる。彼らの生活はただ一事を追求するのであり、その強さは行動の驚くべき一貫性から生じる。

社会的人間 (homme social) は、常に中心から円周上のあらゆる点へと向かわざるをえない。無数の情念や考えを持ち、基地と作戦行動の広さがあまりに不釣り合いなため、絶えず弱さの現場をおさえられてしまう⁵。

『歩きかたの理論』の中心的命題である、歩きかたを見ればその人の内面が分かる、という考えに関連して、「未開人」は自分の思考を隠すのが「社会的人間」よりもずっと上手である、なぜなら彼らは一つの考えしか持っていないからだ、という主張がこの一節の直前でなされているのだが、バルザックはそのわけを「未開人」と「社会的人間」における「魂」の相違を明らかにすることによって読者に説明する。すなわち、「社会的人間」の「魂」は「無数の情念や考え」をその内に擁するがゆえに、持てる力を分散的に使用せざるをえず、結果としてパワー不足に陥りがちであるのに対し、「未開人」の「魂」は「唯一の思考、唯一の欲望」しか持たないために、それだけ力に余裕がある。それゆえ「未開人」だけが内面を隠すのに十分なだけのエネルギーを「魂」から汲み出すことができるのだ、という説明である。ここには、『従妹ベット』における「文明人」と「未開人」の対立とまったく同一の図式が認められる。

つまりバルザックは一貫して、「未開人」には「文明人」あるいは「社会的人間」にはない力があるのだと主張していることになる。それではなぜ、こうした主張が繰り返されるのであろうか。原始的な人間がその性質の単純さから汲み出す力強さへの憧憬もあるだろうが、その一方で、そうした一時的な優位を持ちうる「未開人」が「文明人」と敵対関係に入った場合に備えて将来の敵を研究しておきたいという気持ちがあったから、というのが本稿の

⁵ *Théorie de la démarche*, CH, t. XII, p. 282-283.

主張である。

しかも、もしも「未開人」がモヒカン族のようにアメリカの奥地ではなく、パリのあちこちに大勢住んでいたら、読者に対してすぐそばにいる「未開人」への警戒を呼びかけることは、「文明人」の安全を確保するという点において、社会的に有意義な行為ということになるだろう。そして実はそれこそが、『従妹ベット』においてバルザックが行っていることなのだ。さきほどの「未開人」についての説明は、実は次のような文章によって締めくくられていた。

野性的なロレーヌ娘 (la sauvage Lorraine) で油断のならないところのある従妹ベットは、この種の人間だった。こういう性格は予想以上によく民衆 (peuple) の間に見受けられ、革命の間の彼らの行動もこれで説明がつくのである。(86)

ここでバルザックは、まず「野性的なロレーヌ娘 la sauvage Lorraine」という表現によって、ベットを「未開人」にごく近い存在であると規定し、同時に都市住民の一員であるはずの「民衆」の大部分も、自分が作った「未開人」あるいは「自然に近い人間」の範疇に入れてしまう。「革命の間の彼らの行動もこれで説明がつく」とは、熱狂にかられてときおり「文明人」を圧倒するような振る舞いに及ぶことがあっても、「未開人」たる民衆はだだをこねる子どものようなものであって、その発作的行動は長続きしない、という趣旨のことを述べようとしたのだろうが、同時に民衆における革命への熱狂がいつまた再燃するか分からないという含みも残している。

バルザックが「文明人」と「未開人」の対立を論じるとき、それは単なる人類学的雑談のようなものとして読まれるべきではないだろう。そうではなくて、目の前にある社会が(中間層の存在が否定されているわけではないが)、「魂」のあり方からして相当異質な二つのグループによって構成されているということ、そしてバルザックが読者とともに属する「文明人」は、「未開人」たる民衆の特性を知ってその反乱に備えなければならない、という主張がそこには読みとられるべきなのである⁶。

⁶ 『従妹ベット』の語り手は、下層階級が抱える種々の問題に注意を払うことなく、一部の下層階級に関して窃盗の常習犯であると断罪した上で、彼らを墮落した存在であると結論する。その限りにおいて、『従妹ベット』がよって立つ政治的立場は、極めて反動的なものであると言わざるをえない。「1838年以來、扇動的な作家たちによって下層階級のあいだに広まった反社会的な学説のせいで、数々の被害を受けなかった主婦がいるだろうか。今日、どこの家でも、使用人から受ける損害があらゆる金銭的損失のなかでも最大のものになっている。」(196-197) 「昔は主人が使用人の身元調査を

それにしても、バルザックは同じフランス人の民衆を「未開人」であると断じて躊躇することはなかつたのだろうか。そう確言するためには、もう少し状況証拠が必要かもしれない。ここで注目されるのが、『従妹ベット』におけるもう一つの「未開人」議論とも言うべき、スラブ人についての考察である。

スラブ人には子どもっぽい一面がある。本当に文明化したというよりも、文明化した国々に侵入しただけのもともと原始的な民族 (peuples primitivement sauvages) はみなそうだ。スラブ人は洪水のように広がって地球の表面を広く覆った。彼らが住んでいる荒野は実に広大なので、その暮らしはゆったりとしている。そこではヨーロッパのように肘で突き合ったりはしない。ところが文明というものは、精神も利害もたえず摩擦していなければ生まれてこない。ウクライナ、ロシア、ダニューブ河の平原、つまりスラブ人は、ヨーロッパとアジア、文明 (civilisation) と野蛮 (barbarie) の間を結ぶ連結符だ。だからスラブ人の中でも最も人数が多いポーランド人の性格には、ごく若い国々に特有の子どもっぽさと気まぐれ (inconstance) などところがある。彼らには勇氣と力の才能があるが、気まぐれが災いして、その勇氣と力の才能には一貫した方法も精神もない。なぜならポーランド人には、沼地で寸断されたあの広大な平原をわたる風のような変わりやすさがあるからだ。(255)

バルザックはここでヨーロッパを文明の地、そこから遠く離れたアジアを野蛮の地としているが、こうした判断については、未知の世界についてのよくある妄言の一つとして見過ごすこともできるだろう。しかしながら、その中間地帯を占めるスラブ人もまた未開であるという発言は、バルザックにとってスラブ世界が決して想像上の世界ではなかつたことを考えると、無視できない重みを持っている。よく知られているように、バルザックはポーランド貴族出身のハンスカ夫人と 1832 年から文通を始めたことをきっかけに、1843 年には夫人が滞在していたペテルブルグを、そして 1847 年には夫人の館があつたヴィエルツシヨヴニア (ウクライナ) を訪問している。すなわち

やったものだが、現在は使用人の方が主人を調べるのである。腐敗はまさしくその極みに達しており、裁判所も厳罰をもつてのぞみ始めたけれども、いっこうに効果はなく、もはや使用人に労働者手帳の所持を義務づける法律を制定するほかなくなっている。」(197) 「時の高等政策に没頭している政治家は、パリの下層階級の墮落がどこまで進んでいるか知らないのだ。その墮落ぶりは、彼らをさいなむ嫉妬心にも劣らない。統計学は語らないが、盗みで金持ちになった四十歳、五十歳の料理女と結婚する二十歳の労働者の数はおそろしい数にのぼっている。犯罪、人種の退化、すさんだ家庭という三重の見地からして、こうした結婚のゆくすえを考えると慄然とさせられる。」(197)

『従妹ベツト』(1846)執筆時において、バルザックにはスラブ世界と直の接触があったわけで、上記の考察を単なる放言として片づけることはできないように思われるのだ。

こうした事情をふまえて、スラブ人を「もともと原始的な民族」と断じる上記の一節を文字通りに読むことにすると、バルザックの「未開人」についての考えが非常に堅固なものであることにあらためて気づかされる。スラブ人の「子どもっぽさ」が二度にわたって指摘されているが、これは先ほどの「未開人=子ども」の図式に一致している。また「気まぐれな」という形容は、感情に翻弄されやすいとされる「未開人」のイメージそのものである。さらに、ポーランド人においては「勇気と力の才能」といった一時的に発揮される美点が、「一貫した方法や精神」の欠如によって損なわれているという指摘があるが、これもそのまま観念のストックがないとされた「未開人」の説明に使えるのである。

こうしたことを鑑みるに、バルザックが大文字で始めて用いる「未開人 *Sauvage*」という語は、一般にそうしたレッテルを貼られているアメリカ原住民などを単に指示するのではなく、あるタイプの間人を一語で説明するために用いられる、厳密な定義づけをされた用語として理解されるべきなのだとわかってくる。

なお、バルザックにおける「未開人」概念の特質は、スラブ人についての次のような評価からも読み取れる。以下は、亡命ポーランド貴族で一文無し彫刻家であるヴェンセスラス・シュタインボックが、なぜベツトの強い意志に屈したままにいるのかを説明した箇所である。

この奇妙な結びつきは、強い意志がたえず弱い性格に対して働きかけたあげくに生まれたものと思われた。弱い性格というのはスラブ人特有の気まぐれのことであるが、そのせいで彼らは戦場では英雄的な勇気を発揮するくせに、日常では信じられないほどの支離滅裂さをみせ、精神的な軟弱さをさらしてしまう。その原因の解明にはいずれ生理学者がとりかかることだろう。生理学者の政治に対する関係は昆虫学者の農業に対する関係と同じだからだ。(108)

ここでも「気まぐれ」と表現されているスラブ人の原始的な性質であるが、それが「生理学者」によって研究されるべき対象であるとされているのは注目に値する。なぜなら、最後の一文の意味するところは、昆虫学者が益虫や害虫の性質を明らかにすることによって農業の発展に寄与できるのと同じように、生理学者もまた諸民族の特質を研究することによって社会の発展に貢

献できるということだろうが、昆虫学者が一般に害虫とされる昆虫に対しても農夫のような反感を抱かないのと同じく、生理学者もまた「未開人」に対してとりわけ侮蔑の感情を持たないと予想されるからである。要するに、「観念」や「感情」といった抽象的な用語を使っているにせよ、「未開人」の内的構造を説明しようという意図の次元において、生理学者と同じ身振りをしているバルザックは、決して「未開人」という言葉を単なる蔑視や糾弾のために使っているのではないということがこの一節から推察されるのだ。

バルザックが「未開人 *Sauvage*」という用語を用いる時、それは一般的に「未開人」と呼ばれている人々を指すのではない。まして「*sauvage*」という語が派生的に意味する、単純さや粗暴さを漠然と表現するのでもない。それは、観念と感情の関係のあり方によってそれと認定されるある種の人間のタイプを指すのであり、スラブ人やパリの下層階級を「*sauvage*」と形容するのは、決して侮蔑の気持ちから出たものではなく、科学的判断にも比較されるべき行為なのである。こうしたバルザックの態度が決定論に基づく最悪の人種差別や階級差別へと通じていることは否めないが、それがバルザックの人間観の重要な一角を占めている以上、これを無視してベットの人物造型を理解することも、『従妹ベット』という作品を解釈することもできないであろう。

「未開人」ベット

さて、「野性的なロレーヌ娘 *la sauvage Lorraine*」と形容されていたベットであるが、彼女はどれほどバルザックの考える「未開人」像に合致しているのだろうか。言うまでもなく、「モヒカン族 *Mohican*(152)」といったそのものずばりの呼称のほかに、「猿のような *simiesque*(80)」、「雌ラバ *mule*(85)」、「ヤギ *Chèvre*(85)」、「龍 *dragon*(118)」、「虎 *tigres*(145)、*tigresse*(239)」、「ライオン *lionne*(196)」、「猫 *chatte*(241)」などあらゆる動物に喩えられていること、そしてリスベットという名前の一般的な短縮形とはいえ、「ベット *Bette*」という音に「獣 *Bête*」の意味が隠れていることによって、通常の意味での「未開人」のイメージがベットの周辺に形成されてはいる。しかしながら、重要なのはバルザック独自の「未開人」観の方であって、それは観念と感情のあり方に関わっていた。ベットの知能のあり方は、例えば次のような一節に読み取ることができる。

従妹ベットがポンス商会でもいちばん腕ききの職人となって生産をしきるよ

うになり、いよいよ店をもてるかという頃になって、急に帝政が崩壊をきたした。ブルボン家がかざした平和のオリヴの枝に、ベツトはたじろいってしまった。133 もあった県が 86 県に減るばかりか、軍隊が大幅に縮小されるというので、仕事が減るのではないかと恐くなったのである。要するに、産業がはらむいろいろな運不運にぞつとしたベツトは、支度金を出そうという男爵の申し出を断ってしまい、気が狂ったのかと思われた。実際、ベツトはポンス商会を買い取ったリヴェ氏とけんかしてしまい、男爵の意見を裏うちした。リヴェとベツトに共同経営させるという男爵の計画はこうしてだめになり、ベツトはただの職人にまいもどった。(81-82)

ベツトは、ユロ男爵と結婚した従姉アドリーヌの誘いでパリに上京して以来、飾り紐の店で職人として働いていた。一財産作りたと思った彼女は、いずれ店を構えるためには必要だと言う男爵の勧めにしたがって、その間に、読み書き算数を習い覚えてもいる。その職業生活は順調そのものと言ってよく、「1811 年には、この百姓女もそこそこに善良で、腕がたち、頭もきれる女工頭になっていた(81)」とあるほどだ。ところがベツトは、いざ店を持てるという時になって、支度金を出すという男爵の申し出を断ってしまう。帝政の崩壊に伴って軍隊が縮小されるから金銀飾りひもの需要が減ってしまうだろう、というのが拒否の理由であるが、男爵はこうした弱気な決心に合点がいかないようで「気が狂った」と判断している。おそらく、たとえ一時期注文が減ることがあろうとも、そんなことを気に病んでいては経営など始められない、独立できるチャンスは限られているのだから多少のリスクは負うべきだ、というのが男爵の考えだったのであろう。

では、なぜベツトは「産業がはらむいろいろな運不運にぞつとした」のだろうか。結論から言うなら、ベツトが「未開人」に属しているからである。淡々とノルマをこなしてゆくような仕事ならいくらでもできるし、他に秀でる能力を発揮しさえするけれども、困難を予想して改善策を探ったり、長期間にわたる資金計画を立てたりなど、「観念」の操作が必要不可欠となる仕事には向かない、というのが「未開人」の特性なのである。なぜなら、「頭脳がわずかな刻印しか受け取れない」人間は、いわば永遠の現在を生きていると言うべきであって、「観念」の助けを借りて過去から未来への時間の流れを再構成し、その流れの中において自分が今何をすべきか考えてみるといった、「文明人」にとってはごく当たり前のことができないはずだからだ。

実際、ベツトは時間の感覚を欠落させた人間であり、そのことは作品中で変奏されつつ表現されている。たとえば、アドリーヌが 30 年も前に夫からもらったカシミアのショールが、それを羨望するベツトにとっては「常に新し

く(89) 見えていたとあるが、これは彼女が時間の経過に関して非常に鈍感であることを示しているだろう。また、ヴェンセスラスを養うにあたって貯金を切り崩していったベットは、「手にするものが金貨の代わりに借用書一枚になってしまったとき、頭に血がのぼり、リヴェ氏のところへ相談に行った(113)」とあるように、貯金が消滅するとそれがあたかも予期せぬ事件であるかのごとくに興奮しているが、継続的に貯金を切り崩していけばいずれ残額がゼロになることは自明であることを考えると、この興奮の原因は未来を予測する力の決定的な欠落にあると考えられる。ベットにとって時間の経過は、把握することが非常に難しい事柄なのであって、金銀モール製造業の将来が少し暗いと見れば、さらにその先にあるかもしれない成功を夢見る余裕はもうないのである。

このような時間についての理解の浅さは、ベットにおける「観念」の世界の狭さ一般を暗示していると思われるが、それはベットの人間関係のあり方にも現れている。夜帰宅した時に門番から手燭台を受け取りながらも、相手が気に入らないことを言おうものならそれを平気で無視するのである。その理由はこう説明されている。

老嬢（ベット）は何も答えなかった。この点ではいまだに百姓女のままで、自分から遠い世間に何と言われようと意に介さなかったのだ。農民には自分の村のことしか目に入らないのと同じで、彼女は自分が暮らしている小集団の意見しか気にしなかった。(106-107)

ベットにおいては、親戚や仕事上の同僚によって構成される小集団だけが自分に関係する人間のすべてであって、それ以外の人間は意見を聞く必要など一切ない遠い世間として一括される。このため、ベットはそうした人々に対して余計な神経を使わずに済み、その分余ったエネルギーを自分の狭い生活圏での活動に投入することができる。こうしたベットの性質は、『歩きかたの理論』において「無数の情念や考えを持ち、基地と作戦行動の広さとがあまりに不釣り合いなため、絶えず弱さの現場をおさえられてしまう」と特徴づけられていた「文明人」の性質と見事な対照をなしているだろう。広い世界を「観念」化して所有してしまっているがゆえに生じる「文明人」の弱さ、おそらくそこには他人の評判を気にしすぎるといふ弱さも含まれていると思われるが、そうした弱さを完全に免除されているのがベットだからである。

さらに、「観念」によって抑制されないために暴走しがちな「感情」の強烈さもまた、ベットが「未開人」であることの指標となっている。カシミアの

ショールと引き換えにヴェンセスラスの存在を明かしてしまったベツトは、姪のオルタンスにこの美貌のポーランド人を奪われてしまうのだが、それを第三者によって知らされた時に、その頭脳は激しい怒りによって一気に燃え上がるのだ。

マルネフ夫人は闘牛士の役を途中で止めた。従妹ベツトがこわくなったのだ。ロレーヌ女は恐ろしい顔つきになっていた。射るような黒い眼は虎のように凝視している。その形相は古代の女予言者はさてもこうだったかと思わせるほどで、ガチガチいわないように歯を食いしばり、ものすごい痙攣で手足が震えている。鉤形にまがった手を帽子と髪の間差し入れて、髪をつかみ、重くなった頭を支えていた。頭が燃えていたのだ！ 頭を燃やした火事の煙が、噴火でできたクレバスさながら、皺の一つ一つから噴き出しているようだった。それは驚嘆すべき光景だった。(145)

溶岩に喩えられた興奮状態の頭脳が、火山の岩盤にも比すべき頭蓋骨の囲いを破らんばかりに勢いづき、クレバスさながらの顔の皺から噴き出しそうだとはい、実に壮大な人物描写であるが、ここで確認すべきことは、ベツトの頭脳が「文明人」の頭脳のような「観念」の貯水池となっていないことである。それは「感情」を冷ますことも、別のエネルギーに変換することもない。「いま、ここ」の世界しかその内部に持っていないベツトの頭脳は、それだけ狭いものとしてイメージされてよいだろうが、その狭い頭蓋が、心臓からマグマのごとく噴き上がってきた「感情」によって弾けそうになるだけなのだ。ここに描かれているのは、まさしく「感情」の専制に頭脳が屈服している「未開人」の姿であろう。

以上の検討によって、ベツトが「観念」と「感情」の観点からして、まさしくバルザックの考える「未開人」であることが明らかになった。これによって、ベツトによるユロ家への復讐を中心的内容とする『従妹ベツト』が、「未開人」と「文明人」の対立を描いた作品であるとの解釈が可能になってくるが、その前にベツトという人物像を形成するもう一つの重要な要素である「処女性」について補足しておきたい。

ヴェンセスラスの裏切りを知ったベツトは、一瞬にして「憎悪と復讐の化身(152)」になるのだが、この豹変は「処女性」についての次のような一般的考察によって説明されている。

「処女性 *Virginité*」には、あらゆる奇形と同じように、独特な豊かさと人を引きつける偉大さがある。処女と童貞は生命力をむだにしないので、はかり

しれない抵抗力と持続力をそなえている。頭脳が温存された諸能力全体によって豊かな発達をとげたのだ。純潔な人々は、彼らの肉体あるいは魂を必要とする時、行動や思考に訴える時、筋肉には綱を、知能には天与の学問を見出す。それは悪魔的な力、「意志 Volonté」の黒魔術である。(152)

この考察の背後にあるのは、『あら皮』(1831)においてもっとも力強く表現されているところの、情熱や過剰な思考は人間の生命力をすり減らすというバルザックの根本思想である。この思想にしたがえば、処女は情熱を抱くことによって起こるはずの生命力の浪費を免れている分だけ、豊富な力を蓄えた存在であるとみなされる。つまり、ベットの頭脳は「未開人」であることによって非常に狭いものとなっはいるが、その狭さは決して頭脳の絶対的な弱さを意味しているのではなく、たとえ数多くの「観念」を受け入れることができない性質であるとはいえ、過剰なエネルギーに満たされており、ある種の活動においては驚くべき力を発揮する可能性を秘めているということになる。

実際、「処女性」に由来するベットの頭脳の豊富なエネルギーは、ユロ家に復讐したいという「感情」のマグマが彼女の頭脳の中で固定観念となって定着した時に、その筋脈を永続化させ、復讐の実行の手段を巧みに考え出す力を彼女に授けることになる。その限りにおいて、ベットは非常に頭脳的な人物として造型されているといえる。ベットによるユロ家への復讐が、暴動のように表面的なものではなく、策略に満ちた「イエズス会式(201)」のものとなるわけは、こうして説明されるのである。また、ベットの外見について繰り返し言及されている「やせこけた(57)」「やせている(80)」「柔軟性のない(196)」といったネガティブな身体的特徴も、彼女のエネルギーすべてがその頭脳につぎ込まれていることを示しているだろう。

ベットは、「観念」による反省によって弱められることのない「感情」の専制の下に生きている、バルザックの用語で言うところの「未開人」であり、その復讐欲は、頭脳の中に固定観念となって根づく。しかも「処女」であるベットは、その頭脳の豊富なエネルギーすべてを復讐欲の満足のために使用することができる。つまりベットは、「文明人」たちの家庭、すなわち個人ではなく家族こそが社会の礎となるべきだと説いたバルザックにとって文明社会の象徴にほかならないものの対極に位置しながら、それを執拗に攻撃する存在として描かれているのである⁷。

⁷ 「私は個人ではなく家族こそが社会を構成する真の要素であると考えている。」

ベットの復讐

それでは、このように文明社会に敵対するベットの復讐は、いったいどのような形で遂行されるのだろうか。比較のために、ベット以外の登場人物による復讐の特徴から検討する。

まず、クルヴェルによるユロ男爵への復讐について考えてみる。クルヴェルは、愛人をユロに横取りされたことを恨みに思い、自分には仕返しの権利があると主張する。そして、ユロの新しい愛人マルネフ夫人に狙いをつけて密かに彼女の第二の愛人となることに成功し、逢い引きのために使っている秘密の部屋をユロに見せつけることによって復讐を完成させる。この復讐の特徴は、復讐者が相手に対して復讐の予告をすること、そしてその復讐がうまくいったことを相手に思い知らせることによってそれが真に完成するという点にある。クルヴェルは自分の力と恨みのほどを相手に見せつけることに喜びを見出していると言えるだろう。

では、モンテスによるマルネフ夫人への復讐はどうだろうか。モンテスは、マルネフ夫人がユロとクルヴェルばかりかヴェンセスラスまでも愛人にし、さらにはクルヴェルとの結婚も決まっていると聞いて彼女への復讐を誓う。そして、彼の生地ブラジルにしか解毒剤のない毒薬によってマルネフ夫人とクルヴェルを殺す。モンテスは、マルネフ夫人に復讐の意図をあらかじめ伝えたりはしないが、彼女が死ぬ前に手紙を書いて彼女の病気が自分の仕業であることをわざわざ知らせている。この復讐は、予告はしないが復讐の完成については犠牲者にはっきり伝える点に特徴がある。

これらと比較して、ベットによるユロ家への復讐を考えてみよう。ベットのユロ家の人間に対する恨みは、美貌の従姉アドリーヌに対する子供時代からの妬みに始まるものだが、アドリーヌが結婚して上流階級に入ったことで社会的な劣等意識と結びつき、あたかも「羊毛の梱包を解いたら最後、そこから孵化して町一つ破壊することもできるペスト菌(82)」のように彼女の心の奥にしまいこまれていた。こうした恨みが、ヴェンセスラスを奪われたことによって一気によみがえり、ベットは「憎悪と復讐の化身(152)」となって「人をだまそうと(152)」決心する。というのもベットは、その生活費の多くをユロ家に負っており、後でモンテスのように外国に逃げることもできない以上、復讐のすべてを隠密のうちに進行させるほかないからだ。こうしてベットの復讐は、犠牲者に対する警告も勝利宣言もなく、ただ相手を不幸に陥

れる喜びと、それを決して相手に気づかせないという用心深さによって特徴づけられることになる。つまりベットには、クルヴェルやモンテスのように、相手に対して自分の恨みや憎悪のほどを思い知らせる機会がないのである。

ベットの復讐に見出されるこうした特徴は、『歩きかたの理論』において展開されていた、「未開人」は一つのことしか考えないから「魂」のエネルギーを温存しており、その分だけ「文明人」よりも内面を隠すのが得意であるという主張に通じるものがあるだろう。実際ベットは「パリ式の加工が、力強く鍛えぬかれたこの魂の表面を錆のように覆っていた(83)」とある通り、パリに上京して以来ずっと自らの本性を仮面によって隠すことに成功している。つまりベットは、文明社会における弱者であることによって、常に自分の考えを隠すことを余儀なくされているのであるが、魂のエネルギーに余裕のある「未開人」であるがゆえに、「文明人」ならば失敗するかもしれないそうした隠蔽が苦にならないし、自ら決意して復讐を進めるにしても、その意図をやすやすと人目に隠すことができるのである。

敵に知られずに遂行されるがゆえに罰せられることもない、こうしたベットの復讐を描くことによって、バルザックはいったい何を伝えようとしたのか。それは、本稿の冒頭でも示唆したとおり、民衆の危険な力であろうと考えられる。自ら「未開人」という人間の種類をデザインし、そこに民衆の大部分を押し込んだバルザックは彼らを、もしもその頭脳の中で恨みとか憎悪とかいった感情が固定観念となって凝固すれば、そうした悪意を決して露見させることなく、上流ないし中流階級に対する仕返しをたくらむことのできる存在であると考えていたのではないか。バルザックは、まさにそうした「未開人」の典型として造型したベットの復讐の手口を詳細に描くことによって、それを民衆によくある性質に由来するものであるとしつつ、読者に注意を呼びかけているものと考えられるのだ。

たとえばバルザックは、ユロー家がベットの真の性質をつかむせつかくチャンスをもぎもぎ逃しているさまを繰り返し描いているが、これは、なぜユロー家がベットの復讐心に気づかないのかその原因を丁寧に描くことで、彼らを反面教師として研究するよう読者を促すためではなかろうか。固定観念となった憎悪を隠すのが上手なベットとはいえ、激しい感情に襲われたその瞬間には、わずかにその煮えたぎる内面をさらけだしてしまうことがあって、それは敵の存在を伝える危険信号として利用されるべきなのだが、アドリーヌはそうした表情の変化をとらえることができないでいる。

「いいえ、愛していても自分勝手なままの人たちがいるわ。あなたの場合もそうよ！」

従妹はうつむいた。糸巻きをみつめていたからよかったが、にらまれたらぞっとするような目つきだった。(88)

ここでベットは、謎の恋人を世間から隠している彼女の愛は自分勝手なものだとなじったアドリーヌに対して激しく憤り、「ぞっとするような目つき」によって憎悪をあらわにしているのだが、相手には全く気づかれていない。

「あら、どうして！ わたし何か悪いことしたかしら、アドリーヌ？」ロレーヌ女はこう言って立ち上がり、威嚇するような態度をとったが、男爵夫人は取り乱して少しも気がつかなかった。(170)

ベットは、ヴェンセスラスには故国に妻がいるのだと嘘をついてオルタンスを気絶させたことで、アドリーヌに叱責され「威嚇するような態度」をみせるのだが、これも見咎められることがない。つまりいずれの場合もベットに怒りを引き起こした当人であるアドリーヌは、ベットの変化に気づかないでいるのである。

ここで合わせて思い出されるべきは、こうした上流階級の人間の不注意と対照的に、ベットが人並外れた観察力を備えていることであろう。ベットはユロ家に対していかなる攻撃を仕掛けるべきか常に考えているので、一家の急所を探るための情報収集を決して怠らない。

巣の真ん中にいる蜘蛛よろしく、リスベットは全員の顔を観察していた。オルタンスとヴィクトランは生まれた時から知っているのも、ベットにとっては彼らの顔は板ガラスも同然で、若い二人の魂が透けて見えるのだった。そのときヴィクトランが何度か母の方を盗み見たので、アドリーヌに何か悪いことが降りかかってくるのだとわかった。[...] オルタンスはといえば、明らかに自分の悩みに気をとられている。リスベットは知っていた。ここ二週間というもののオルタンスは、それまで順調な人生を送ってきた実直な人々や若妻たちが金銭の不如意によって感じるあの不安を初めて経験し、しかもそのつらさを隠していたのだ。(207-208)

「巣の真ん中にいる蜘蛛」にたとえられるベットは、かかった獲物をじっと観察しながら、その衰弱を待っていずれは致命傷を与えようとほくそえんでいる。もちろんこうしたベットの鋭い観察力は、復讐を誓ったことによつて突然生じたのではなく、もともと寄食者としての弱い立場上、人々に気に

入られる必要があったがゆえに、時間をかけて獲得されたものである。作品冒頭近くにおいて、復讐を誓う前のベットについて次のような性格描写がなされていた。

ベットは、自分がみんなの意向にしたがうほかない人間であると悟り、人生を理解するにいった。みんなに好かれたいと思ったので、若者とは一緒に笑い、若者の心をいつでもとらえるあのお追従を使って親切にふるまい、その願望を見抜いては擁護し、若者の代弁者となり、良き打ち明け相手のふりをした。ベットには彼らを叱る権利もなかったからである。(84)

自分が上位を占めていると思うがゆえに、ベットを観察する労をとらなかったユロ家の人間と、自分が下位にあると自覚しているがために、ユロ家の人々を観察せざるを得なかったベット。両者の対照はおそらく、考えごとが多すぎるために身の回りのことがしばしば疎かになってしまう「文明人」と、「いま、ここ」の現実についてだけは比較的正しく把握できる「未開人」との対照に重ねられるだろうが、いずれにせよそうした上下関係において、家来が主人に対して敵対の感情を持った場合には、家来はそれまでに培った観察力によって主人についての情報を素早く入手し、自らの密かな復讐のため利用することができるのに対して、主人は家来のことを観察する術を持たないがゆえに、その攻撃から身を守ることができないのである。

以上、ベットの復讐の特徴として明らかになったのは、それが人目に隠されたまま進行するという点、そして復讐の犠牲者となるべき相手についての鋭い観察に基いているという点の二点であるが、これはどちらもバルザックの考える「未開人」の特質に由来しており、その限りにおいてベットの復讐は、同じく「未開人」とされる民衆や下層階級が上流階級に対して企んでいるかもしれない密かな反乱の脅威を表現したものであるとして読解できるだろう。

さて、上記のような「未開人」の長所を生かして進行するベットの復讐であるが、逆に「未開人」の短所によってその進行を妨げられる場合はないのだろうか。先ほど見た通り、「未開人」の頭脳はごく狭い世界しかとらえておらず、観念によって構築される世界を見渡したり、時間的な見通しを立てたりすることを非常に不得手としていた。こうした弱点は、本来なら当然考慮すべきことからベットを遠ざけ、彼女の復讐を失敗へと導く可能性があるだろう。実際、ベットによる復讐計画は、第一に社会制度に関する無知によって部分的に失敗している。彼女は自分を裏切ったヴェンセスラスを借金未払

いの咎で牢屋に入れてしまえば、オルタンスとの結婚をだめにする事ができると考えていた。

彼女は牢獄を子どもが誰も想像するとおりのものだと想像していた。つまり、独房への監禁と単なる禁固とを区別していなかったのである。独房への監禁は最高度の禁固であって、刑事裁判だけがこれを用いる特権を有している。(153)

ベットは、デュマの『モンテ・クリスト伯』に出てくるような独房とは違って、ヴェンセスラスの居場所が秘密にされることはないし、誰かが彼の借金を払いさえすればすぐにも解放されるであろうことが分かっていない。結局、ヴェンセスラスはめでたくオルタンスと結婚し、ベットは復讐計画の練り直しを迫られることになる。

ベットの頭脳の弱点に由来すると考えられる復讐の失敗は、これだけではない。「唯一の思考、唯一の欲望」にすべてを集中させると言われる「未開人」ベットは、欲望の満足を最大化させるためにはどうしても必要になるはずのある種の反省を行うことができず、あたかも過食によって体を壊してしまう美食家のごとくに、やりすぎによって復讐を不完全なものとしてしまうのだ。この反省能力の欠如は、ベットのヴェンセスラスに対する関係においても色濃く現れていた。ベットは、自分が愛情を満足させればさせるほど相手の健康と将来が破壊されてゆく状況にあることを察知しながらも、そうしたジレンマから抜け出す方法を見つけない。

彼女は彼を幸福にしたいと望みながら、その彼が屋根裏部屋で青白く衰弱してゆくのを見ていた。[...] 彼女は四年前から青年に夢中だったが、この出口のない無分別な暮らしをいつまでも続けたいという、気違いじみた希望をあたためていた。けれども自分が固執しすぎると、子どもと呼んでいる相手を破滅させてしまうことになる。こうして本能と理性が葛藤するので、ベットは公正を欠き、横暴になった。(118-119)

ベットはヴェンセスラスを屋根裏部屋に閉じ込めることによって、彼を独占する喜びに浸っているのだが、同時にそれが欲望の対象を弱らせてゆく結果となっている。ここで必要だったのは、ヴェンセスラスとの異常な関係を適度なあきらめとともに正常化することだったろうが、ベットにはそうした理性的な判断ができない。結局、オルタンスと結婚したヴェンセスラスは死なずに済むのであるが、こうしたベットの手加減のできない性質は、復讐を遂行するための活動においても発揮され、間接的にはせよ別の犠牲者

を生んで、復讐の成就の障害となってしまう。すなわち、ベットが次なる結婚相手に選んだユロ男爵の兄ユロ元帥が、ヴェンセスラスの代わりに死ぬことになるのだ。

結婚の最終公示の四日前に起きたこの死は、リスベットにとって晴天の霹靂だった。この雷によって、納屋におさめた収穫物が納屋ごと焼けたようなものだった。(353)

もちろん、ユロ元帥の直接の死因は、ユロ男爵が公金横領によってユロ家の名誉を傷つけたことにあるのであって、決してベットの独占愛の餌食になったわけではない。しかしながら、なぜユロ男爵が公金横領をするほど金に困ったのかを考えると、その原因が抑制されることのない野放図なベットの復讐欲にあったことを忘れるべきではない。ベットは、ユロ元帥と結婚して未亡人になったら高額な寡婦年金を受け取り、そのころには落ちぶれているはずのユロー家の庇護者となって立場を逆転させるつもりでいたのだが、マルネフ夫人と結託してあまりにも早くユロ男爵を破産させてしまったせいで、自分の描いた復讐計画を自ら頓挫させることとなったのだ。「ロレーヌ女はよくあることだがあまりにも成功しすぎたのである(353)」とある通り、ベットの復讐作戦は、局地戦における大成功が全体としてはマイナスになってしまうような、先の見通しが非常に悪いものとなっているのである。

加減を知らないがゆえに、最終的に自分にとって損な結果を引き寄せてしまうというベットの性質は、アドリーヌに対する攻撃においても認められる。アドリーヌは、夫の公金横領の件で自殺に追い込まれた親戚を救おうとして、貞淑な人生を捨てる覚悟でクルヴェルに20万フランを無心し、失敗した後もその一件を心の傷として負っていたのであるが、ベットは事件の詳細を知らないながらも、どうやら威力がありそうだと判断した「20万フラン」という言葉の爆弾をユロー家に対して使用してしまう。

リスベットはユロ家の人々の断固とした態度をくつがえしてやりたいという欲求にとらえられ、こう答えた。

「彼女にはあなた方をやつつける武器があるみたいよ。何のことかわからないけど、今にわかるでしょう… はっきり言わなかったけど、アドリーヌに関して20万フランがどうかという話みたいよ」

ユロ男爵夫人はかけていたソファの上に音もなく倒れると、恐ろしい痙攣が始まった。(401)

ここでベットは、マルネフ夫人がクルヴェルから仕入れたアドリーヌについての情報を、なんの手加減もなく一家に投げつけている。これによってベットは期待以上に従姉を傷つけることができたわけであるが、同時にその傷があまりに深かったために、母親思いの甥ヴィクトランにマルネフ夫人への復讐を決意させてしまう。結果として、ヴィクトランは殺し屋を雇うこととなり、ベットはユロ家への復讐を行うための「斧(201)」であったマルネフ夫人を失うはめになる。ここでもベットはやりすぎと軽率さによって失敗してしまっていると言うべきだろう。

要するに彼女の復讐計画は、最終的な成果を最大にするためには必要になるはずのバランス感覚を徹底的に欠いているがゆえに、全体としての方向は正しくとも、思わぬところですべてが泡に帰すような脆弱性をはらんでいるのである。こうした弱点は、ベットの「未開人」的な頭脳が先の見通しを立てるのに必要な観念操作を不得意としていることに由来しているだろう。

以上、ベットによる復讐の特徴を知るために、その優れた部分と劣った部分のそれぞれについて検討したわけだが、実際のところ彼女の復讐計画は成功したのだろうか、それとも失敗したのだろうか。語り手は、家出していたユロがアドリーヌのもとに戻る一方で、肺結核のせいであと一週間の命となったベットについて「多くの勝利に飾られたこの長い戦いの最後で敗れた(448)」と述べている。確かに、落ちぶれて家出していたユロの居所を知りながら、それを一家に隠しつつ生活費を与えるといった復讐欲を満足させることのできた時期もあったけれど、ユロが帰宅し自分の命がもうないとなれば、彼女の復讐は失敗したというほかないだろう。復讐の意図を隠し通したベットは、自分が一家の恩人として死の床で惜しまれていることに暗い満足を味わっているが、「アドリーヌは幸せになって死ぬんだ！(448)」という思いは、ベットの死を早めるほどに悔しいものであった。

それでは、このベットの死によってユロ家の人々は、ベットが象徴するところの民衆や下層階級の脅威からついに免れることができたのだろうか。もしくは、脅威を完全に振り払うことができないまでも、それに対する抵抗力を養うことができたのであろうか。答えは否である。まず、最後までベットの正体を見破れなかったという点に彼らの無能さがあった。ベットは自然死によって一家から駆逐されただけなのであり、そのような偶然がなければひき続きベットの攻撃を受けていたかもしれない。これでは、ユロ家が危険な民衆の脅威を真に免れたとは言い難いだろう。さらに注目すべきは作品のエピローグである。ベットを失った一家は料理女アガトを雇うことになるのだ

が、そのアガトがあたかもベットの仇をうつがごとくに、アドリーヌに最後の一撃を下すのだ。

1845年の12月の始め頃、セレスティーヌ（ユロ家の嫁）は、イジニー生まれの太ったノルマンディー娘を料理女に雇った。背が低く、太く赤い腕をして、顔は月並み、日々の事件をねたに書かれる芝居みたいに愚かで、バス＝ノルマンディー地方の娘たちがかぶる伝統的な綿の縁なし帽をなかなか手放さなかった。[...] 当然のことながら、屋敷にはこのアガトという名の娘がやって来たことに注意を払う者は一人もいなかったが、彼女こそは、毎日のように田舎からパリにでてくるあの厚かましい娘だったのだ。(450)

ノルマンディー地方の昔風の縁なし帽を使い続けるアガトの姿は、最新流行の服を「帝政時代の流行に合わせて、あるいは自分がロレーヌで着ていた衣装そっくりに作り直して台無しにしてしまう(85)」と言われていたベットの姿を彷彿とさせるが、内面の厚かましきにもかかわらずユロ家の人々にまるで警戒されていないという点においても、ベットによく似た存在であると言えるだろう。その意味で、アガトもまた危険な民衆の一人であるわけだが、彼女こそがユロ一家の崩壊が完成させることになるのである。ある晩寝室から消えた夫を探していたアドリーヌは、アガトの部屋からささやき声がもれてくるのを耳にする。

アドリーヌは男爵の声だと気づき、恐怖にかられて立ち止まった。アガトの魅力に引きよせられた男爵は、このひどく醜い娘の打算ずくの抵抗にあい、こんなぞっとする言葉を口にするまでになっていたのだ。「女房ももう永くない。よければ男爵夫人にしてやるよ。」

アドリーヌは悲鳴をあげ、手燭を落とすと、逃げ出した。

3日後、男爵夫人は、前夜に終油の秘跡を授かり、いまわのきわにあった。(450-451)

ユロ男爵は妻の葬儀の後パリをたち、アガトと結婚する。こうして、ベットがあればほど望んだアドリーヌへの復讐は、同じ民衆の女であるアガトによって果たされたことになる。ベットの生前にその毒牙から逃れる術を学ぶことがなかったユロ家は、その無知によって最後には敗北を喫したと言うべきであろう。

結論

『従妹ベット』においてバルザックは、ベットがユロ家に対して仕掛ける復讐が、いかなる長所と短所を備えて遂行されるのかを説明しつつ、「未開人」について理解不足のユロ家が、彼らに敗北するさまを冷徹に描き出した。ここに読み取れるのは、ベットとユロ家の間にある深い溝なのであるが、バルザックはそれを頭脳のあり方の違いにまでさかのぼって説明しようとする。

バルザックはすでに、中流以上には決して出世できない知能に生まれついた香水商を主人公とする『セザール・ピロトー』(1837)という作品を書き、身分制に基づく社会秩序が大革命によって失われたにせよ、生まれ持った「知能」という基準が新たな安定的階層構造を作り出しつつあるという見解を提示していた。ところが『従妹ベット』(1846)においては、知能において明らかに劣っているはずの下層階級に属するベットが、その弱点を克服しないまでも、「未開人」的と形容される頭脳の特質を最大限生かすことによって、上層階級の人間に復讐をたくらみ、それをある程度まで成功させてしまう。おそらくここでバルザックは、自らが望むような安定した社会秩序が実現されていないことを認めた上で、いつまた新たな革命があるかもしれないことを図らずも予言しているのである。そして歴史が証するように、この予言はわずか2年後に、二月革命が勃発することによって的中することになる。